



南平小だより 2月号

学校の教育目標（キーワード）

○かんがえる子 ○つよい子 ○やさしい子 ○くしけない子

校長 千葉 智弘

〒191-0041 日野市南平4-18-1 Tel(042)592-2021 Fax(042)592-2022



「考える子」を考える

副校長 長塚 淳

3学期の始業式では、校長先生より「3学期は1年間のまとめの学期」というお話がありました。児童も教員も、この1年間でたくさんの学びを得ることができました。1年間かけて自分たちが取組んできたことや続けてきたことについては、しっかり時間をとって振り返らなければ、その成果や課題、次への目標を立てることは難しいものです。校長先生のお話を聞いて、改めて「まとめ」の大切さを意識することができたのではないのでしょうか。「まとめ」とは、自分たちが時間と労力をかけて取組んできたことを客観的に見つめ直し、その意味や価値を確かめ、よりよい仕上がりとするために補ったり、次回への準備をしたりする活動だと、私は考えます。この「まとめ」をするには「思い出す」活動や「考える」活動が必要です。このような思考活動を行うことで、学んだことを固定化させ、定着を図ることが期待できます。

本校では「自ら考え学ぶ子（考える子）」を教育目標の重点目標としています。教育目標を達成するために、我々教員は、指導法を確立したり、指導技術を高めたりする目的で、校内研究という取組を年間を通じて行っています。校内研究で出た意見を研究授業という授業で実践し、そこから分かったことを使って授業の工夫・改善に取り組んでいます。どのようにすれば「自ら考え学ぶ子」が育成できるのか、我々教員は日々それを追い求めています。また、目標の文言には「自ら」とあり、子供たちが主体的であるべきなので、更なる工夫が必要となります。

話は変わりますが、2学期の終わり頃から、私のもとに2年生の児童が訪ねてくるが増えました。なぜだか分かりますでしょうか。それは、九九の検定を受けるために訪ねてくるのです。これは、おうちの方、担任や友達など、相手が変わっても正確に九九が唱えられる程習熟させ、最後の難関として、副校長や校長先生といった、通常の緊張感を上回る状況においても九九が唱えられることを実証し、技能の習熟の確認はもちろん、高い達成感や自信を味わわせたり、それを目標とさせたりする仕組みとして、2年担任が企画したものです。さて、この取組は、「考える」活動なののでしょうか。

私は「考える活動そのものではない」と考えます。理由は「憶える活動」だからです。では、値打ちのない活動なののでしょうか。私は、たいへん値打ちがある活動だと考えます。「憶える」ことは、「考える」ことを支えるものであると考えるからです。さらに言えば、考えることの一部なのではないかとさえ思います。

「考える」とは、課題が発生したときに、自分の経験や知っていることなどの「憶えたこと」を引き出し、「この時はこうだった、あの時はああだった、今回はこうだからこうしよう」といったように、引き出した経験を関連付けの中で、新しい対処の仕方を捻り出す活動ではないかと考えます。ですので、関連付けられる材料、つまり経験した記憶がなければ、「考える」ことはできないと考えます。九九の暗唱は、体を大きく動かすことはありませんが、「憶える」という静かな「経験」「体験」「練習」により記憶し、考える際に有用な材料を意図的に準備する活動です。そう考えた時、本校の重点目標「自ら考え学ぶ子（考える子）」を支える活動であるということが出来ます。ただし、「憶える」ことを強引に進めすぎると、主体的な取組とならないので、少しでも楽しく、無理なく取組ませ、より高い達成感や自信を子供たちに感じさせたいので、上記のような九九検定を、2年担任が企画した、ということです。

よく漢字テストなどで「考えたけど浮かんでこなかった。」と児童が言うことがあり、考える力が弱いのでしょうか、といった話を伺うこともあります。浮かんでこないのは考える力が弱いというよりは、考える材料（「経験」「体験」「練習」）が足りないのかもしれません。また、「自分の考えがもてない」なども同様かもしれません。

学校やご家庭で子供たちに様々な経験をさせたり、役割を与えたりすることは、その活動が記憶に残り、「考える子」を育てるためにとても有効な取組をしていることになるのではないのでしょうか。また「憶える」のような一見「教え込み」を思わせる取組であっても、取組み方を工夫することで、「考える」ことに大きく繋がっていく可能性を秘めているのかもしれない。